

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2003年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学研究科	教育学専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏名	
	文学部教授	北澤毅 印	
<b>自然・人文の別</b>	自然 ・ 人文	<b>個人・共同の別</b>	個人 ・ 共同名
<b>研究課題</b>	構築主義的感情概念による教師－生徒関係の分析 －感情社会学の動向をふまえて		
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科教育学専攻3年	芝田奈生子 印	
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科教育学専攻3年	芝田奈生子	
<b>研究期間</b>	2003	年度	
<b>研究経費</b>	200	千円	

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の目的は、構成主義的感情概念の捉え直しを図ることにある。感情社会学は、それまで生理的、本能的なものと捉えられてきた感情経験が社会的なものであることを主張する。中でも構成主義的アプローチは、感情経験の際に、個人の主体的認知が果たす役割を重視し、それらが役割期待や社会規範といった社会的な要素に影響を受け、時に変容がもたらされうるという事態に注目している。本研究ではそうした感情概念を、その限界と問題という点から批判的に考察し、感情経験を徹底的に一つの社会的な達成物として捉える研究視点を提示する。その上で、具体的な教師－生徒間相互行為場面の分析可能性を示唆することを目指す。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 感情社会学 ] [ 構築主義 ] [ 教師－生徒関係 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

感情社会学における構成主義的アプローチの中で、具体的に考察の対象として取り上げて検討したのは、ショット (Shott 1979) とホックシールド (Hochschild 1979) の理論である。個人の内部で展開する過程に、外部から社会・他者によるサンクションがなされ、時にその過程に何らかの変容がもたらされうるという事態をもって、「感情とは社会的なものである」と述べる彼女らの議論はそれぞれ以下のように展開される。

ショットによれば、個人がある感情を経験するには、何らかの生理的喚起とそれに対する認知的ラベリングとの2つの要素が必要とされる。つまり、同じような生理的喚起が生じようとも、そこに付与する意味づけによって、経験される感情が異なりうるということである。しかし、こうした個人的解釈過程を重んじる説明を字義通り受け入れ、個々の差異にのみ焦点を当ててしまうと、大抵の場合、他者と似たような感情経験を共有できているというわれわれの日常的な経験がうまく説明できない。そこで、原理的にはいかようにもラベリングが可能でありながら、社会的混乱が招かれずに済んでいるという事態の説明として、ショットはある特定の感情—具体的には当惑、恥—が社会統制の役割を果たしていることを主張した。彼女はそれらを役割取得感情と名付け、人は自己統制の経験を繰り返すうちに、社会・文化的に適切とされる感情を抱けるようになっていくと考えたのである。彼女によれば、感情の社会化とは、個々の場面において、個々人が役割を内面化することと考えられる。一方、ホックシールドによれば、人はまず状況定義をした上で、対応する感情を経験していると捉えられている。そしてそのようにして経験した初期的な感情を、場に潜む感情規則と照らし合わせ、規則に抵触していることを認知した際には、規則適合的な「場にふさわしい感情」として適時的・再帰的に経験しなおすことを求められることになる。この一連の営みを彼女は「感情管理」という言葉で表している。彼女の捉え方によれば、感情の社会化とは、個々の場に潜む感情規則を個々人が内面化することと考えられるのである。

こうした構成主義的感情概念が、われわれが日常生活者として感情についてとりおこなっていることの一端をうまく説明しているものであるということ否定するつもりはない。しかしそれを、感情経験に対する包括的な説明として一般化してしまうことに対しては、疑問を呈しておくべきであると考えているのである。中でも、感情経験をめぐる主体的な認知・解釈過程そのものが個人の内面において展開するものであるとみなすスタンスに対してである。いずれの理論もこの点を前提として捉えることで展開可能となっているのだが、この点に対し、A:感情経験の私秘性、B:感情経験の重層性という2点に分けて批判的検討を試みたい。

A. 感情経験の私秘性とは、解釈実践が社会の影響を受けつつも、究極的には個人の内側で、他者に知られることなく主体的に展開されるということを示す。しかし、そうした私秘性・主体性を前提とするならば、ある個人の感情経験は、具体的な本人の言明をもってしか捉えられないことになる。ここにこそ、この分析態度の限界が表れている。この捉え方では、感情経験を他者が検証することは原理的に不可能になってしまうからである。つまり、当該個人の主張する感情経験についての事後的な解釈に対しては、反証が不可能ということになろう。これは研究上の大きな問題である。

また、日常的なやりとりに目を向けてみても、感情をめぐる当の個人の解釈が常に重視されているわけではない。例えば、誰かが何らかの感情を抱いていることを明示的に述べたところで、それが他者によって必ずしも受け入れられるとは限らず、否定されるという状況を容易に思い浮かべることができるのではないだろうか。主体性を過度に重視する捉え方では、このような事態が説明不可能である。

B. 感情経験の重層性とは、反省的实践を伴わない自明視された何らかの経験と、それに対してなされる二次的な行為という説明図式のことを示す。つまり、ショットの場合は、感情は生理的喚起とそれに対する認知的ラベリングによって経験されるという二段階の説明のこと、ホックシールドの場合は、初期的感情経験、それに対するモニタリング、さらなる管理の必要性という段階的な説明のことを示す。まずショットの示す感情形成過程を時系列的に追うならば、「生理的喚起」が「特定の感情語彙によるラベリング」に先行することになる。このように捉えるならば、今度はその生理的喚起を引き起こした何らかの意味ある刺激、つまり「それ以前の状況定義」がさらに先行することになるはずである。にも関わらず、ショットはこの点を所与のものとしており、問うていない。彼女は、単なる外的刺激が生理的喚起を引き起こすと捉え、説明の出発点としてしまっているのである。つまりこれは説明図式そのものの抱える限界なのである。というのも、このような説明図式が、無限に「それ以前の社会的要素」を追究可能としてしまい、無限後退に陥りかねないからだ。それを避けるためには、研究者が恣意的にその出発点を作り出すよりほかなくなってしまう。とするならば、感情を経験している当事者の主体性を重視するというそもそもの研究姿勢と食い違うことになりはしないだろうか。ホックシールドもまた、初期的感情経験を引き起こす社会的要素そのものの存在を重視していながら、それを具体的に取り上げることはしていない。絶えず展開されていく相互行為の中で人がある感情経験をしたときに、それが初期的なものなのか、それとも二次的なものなのかをそ

**研究成果の概要 つづき**

れほど容易に区別することができるのだろうか。

ここでまた日常的なやりとりに目を向けてみたい。われわれは、いちいち解釈過程など介在させずとも、ある感情を端的にそのものとして経験することが可能ではないだろうか。その経験は、重層的なものというよりもむしろ、ひとつのセットになっていると言えよう。感情経験は社会的相互行為過程の中に「うめこまれている」のであって、「生活の織り合わせ」から完全に解き離すことができないのである。したがって、その結びつきをこそ検討すべきなのである。その際に本研究が依拠するのは、クルター (Coulter) の<感情>概念である。一言で言えばそれは、日常生活者であるわれわれの、日常的な感情経験の仕方を詳細に検討していくという姿勢であり、絶えず展開されていく具体的な相互行為の中に、感情経験がいかにして立ち現われているのかを問うことである。

怒りの〔他人への〕帰属が正当であるか否かは、そのような表明が〔本人から〕なされるかどうかには、必ずしも依存していないし、顕わにされた怒りに特定の感覚状態が伴っているかどうかとも、無関係なのである。…有意味な対象・状況があればこそ情緒の存在は理にかなったこととなるのである (Coulter 訳書 1998, 190、192 頁)。

このような概念を採用するならば、感情研究は、ある特定の感情がいかなる内的解釈過程を経て生じるのかといった一対一対応の説明図式を模索するのではなく、どのような状況でどのような感情経験が合理的、もしくは理解可能なものとされているのかといった局所的な達成の様子を詳細に検討するということになる。そこで問われるのは、例えば、ある感情経験がどのような状況カテゴリー、行為カテゴリー、人々のカテゴリーと適切に結びつけて記述されるのかといった社会的な慣習である。

最後に相互行為場面で実際になされた発話を取り上げ、それを<感情>概念によって捉え直す、ごく簡単なデモンストレーションをしてみたい。小学校 4 年生の国語の授業中になされた以下の発話を検討してみよう。

「ちょっとみんなおかしいよ。『お母さんは』ってところを A ちゃんが『お父さん』ってちょっと間違えただけなのに、笑うなんて変だよ。だってこのところは書いてあるだけだっかわいそうじゃない。特に A ちゃんが読んでくれたところは、『死んでいるから人じゃない』とか、すごいことが書いてあるところだよ。心に、ふざけたところがあると、すぐにウフフなんてなっちゃうけど、今読んでいるおはなしは、そんな笑うおはなしじゃないよ。こんなところで笑うなんて、先生は、このおはなしではおかしいと思うよ。いい? 良く考えてみてください。」

ここで引用した発話にはそれほど多くの情報が込められているようには思われなくてもいい。しかし、細かく見ていくと、当該の語りによって、次元の異なるいくつかのことがらが同時になされていることを確認できる。以下では簡単に 3 つに分けて検討してみよう。まず、①この発話をしている人が「先生」とカテゴリー化されていること。これは同時に、相互行為の相手が「生徒」としてカテゴリー化されていることでもある。ここから、②この場面で行われていることが「授業」、つまり、生徒-教師間でなされる「教える-教わる」という相互行為としてカテゴリー化されていること。さらに、③この授業のこの場面では「笑う」という行為が好ましくないものと見なされているということである。

こうした様々な情報の中から<感情>を読み解くのに重要なのは、語りの直前のやりとりの中にあつたとされる、「笑う」という行為が、当該場面で遂行されている実践的課題の達成を妨げるものとして意味づけられていることである。「笑う」という「生徒」の行為が、一方で「ある生徒の読み間違いに対する笑い」というかたちでのカテゴリー化も可能であるにもかかわらず、「心にふざけたところがあつたために笑ってしまった」と「教師」によってカテゴリー化されている。このようにして人々のカテゴリー、行為のカテゴリー、状況カテゴリーと適切なかたちで結びつくことによって、「ふざけたところのある心」が当該相互行為場面にリアルなものとして立ち現れることになる。そしてさらに、立ち現れた<感情>は、それ以降も展開されるであろう授業という相互行為をスムーズに進行させるための役に立つことになるのである。

本研究では、感情経験を捉える際に、それを主体的な認知・解釈に基づき、個人の内側で展開する過程として想定する研究視点の限界と問題点をあげ、それらを徹底的に社会的なものとして捉えるという視点を紹介してきた。この新たな研究視点を中河にならって、「より徹底した構築主義の可能性」(中河 1999, 211 頁)と名付けるならば、その可能性を実証すべく、具体的な相互行為場面の詳細な検討が目指されるべきであろう。この点に関しては今後の課題としたい。

## &lt;引用文献&gt;

- Coulter, J. 1979, 西阪仰訳『心の社会的構成—ウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点』新曜社, 1998。  
 Hochschild, A. R. 1979, "Emotion Work, Feeling Rules and Social Structure" American Journal of Sociology 85(3), pp. 551-575.  
 中河伸俊 1999, 「社会構築主義と感情の社会学」『社会問題の社会学—構築主義アプローチの新展開』世界思想社, 198-224 頁。  
 Shott, S. 1979, "Emotion and Social Life: A Symbolic Interactionist Analysis" A. J. S. 84(6), pp. 1317-1334.

※ この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 芝田奈生子「構成主義的感情概念再考—〈感情〉をめぐる相互行為の分析へ向けて—」『立教大学教育学科研究年報』第47号, 2004, 69-79頁。

④ 芝田奈生子「言語獲得以前園児の〈泣き〉をめぐる意思・感情の社会的構築」共同研究：文化としての涙(2)—保育園児の〈泣き〉をめぐるしつけ相互行為場面から—『第55回日本教育社会学会大会発表要旨集録』, 2003, 267-269頁、及び当日配布資料。